

卷頭言

病院長 相田 浩

今年のお正月は雪国新潟としては穏やかでした。2月になり久しぶりに山間部を中心に豪雪になりました。その後急速に暖かくなり、3月には夏日を記録する日も出てきたかと思えば、急激に冷え込み、雪までちらついています。異常気象という言葉が日常になっている感があります。

天災は忘れたころにやってくるといいますが、昨今は忘れる暇もなく次々に災害が襲ってきます。ここにきて富士山の噴火や、南海トラフに関する大地震の被害想定などが発表されました。このような天災でも対応をしっかりすれば死傷者を大幅に減らせる可能性があるそうです。各自治体での対応も限界があるでしょうから、国としての対応が必要だと思いますが、議論がなされているように見えません。国際情勢を見ても、解決に向け進展が見られないウクライナ情勢、中東問題。さらには某大国の大統領の政策。遠い異国の話ではありますが、日本への直接的間接的な影響が大きい問題です。今まさに国家存亡の危機に直面しているにもかかわらず、政治献金などの懐事情に関する議論ばかりです。これでは災害で被害に遭われた方々も浮かばれません。少しでも早く安堵できる日が来ることを願ってやみません。

我々医療界は、自然災害や次のパンデミックに備える必要があります。しかしながら昨年の診療報酬改定の影響により、多くの医療機関が経営難に陥っています。これは人災です。特に地域の救急医療を担当し、手術をこなし、分娩に対応している病院の多くが多額の赤字を出し、病床削減などの対応を迫られています。出生数は予測をはるかに上回る減少で、地方での分娩は不採算部門になってきています。政府は異次元の少子化対策と言っていますが、分娩が不採算なら分娩施設を維持するための方策や支援を真剣に考えてほしいと思います。待機児童などの問題は少子化により自然に解消されています。高校授業料無償化は即効性のある少子化対策になるのでしょうか？これから生まれてくる子供たちを増やさなければ日本という国に未来はありません。また、骨太の方針による医療費抑制により、医療は衰退産業化しています。昇給もままならず、医療界から人材が離れていきます。医療は地域の大切なインフラです。医療のない場所での生活は困難です。このため次世代の医療を担ってくれる若手の育成も必要です。いくらAIが進歩しても人の手のぬくもりに勝るものはないと思います。患者さんに触れ、その温もりを感じ、自身の温もりをもって治療にあたるそんな医療人が育ってほしいと願っています。

今回第21号の病院誌をまとめました。この病院誌では1年間の私共の活動の記録をまと

めておりますが、興味をお持ちいただけたなら幸いです。

最後に院長として、多忙な業務の中、本誌編集発行に尽力してくれたスタッフに心より感謝いたします。また、原稿を快く引き受けてくれた皆さんにも感謝いたします。更に何よりも、地域医療を守るために頑張ってくれているすべての職員に心より感謝いたします。これからも地域医療を維持するために頑張っていきましょう。

お読みいただいた皆様方のご健康・ご発展を祈念して巻頭言とさせていただきます。